
仮面ライダー龍騎 ~ EPISODE Kanon Trillogy ~

龍騎鯖威武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー 龍騎 E P I S O D E K a n o n T r i l l
o g y

【Nコード】

N 5 9 9 0 W

【作者名】

龍騎鯖威武

【あらすじ】

城戸真司から「仮面ライダー 龍騎」を継ぎ、新たな「仮面ライダー 龍騎」に変身する少年。その少年を含め、彼の身の回りの者たちが主人公となる物語。彼等は一体、何を見出すのか。あなた達に見届けてほしい。

日常 「2人の剣士」 (前書き)

お待たせしました！…最近テストで、時間が無かつたんですよ(汗)
「龍騎トリロジー」第1弾は、祐一と舞にスポットを当てていきます！

これは、ディケイド編終了直後です。NoMen編の少し前ですの
で、ご了承を。
それではどうぞ…。

日常 「2人の剣士」

ザァン！

「…逃がした」

舞は今日も、魔物退治を続けていた。

「あまり無茶するなよ？ 足だって全快じゃないのに」

「そうですね。それに夜は女の子には危険なんですよ」

「佐祐理さん、そこですか…」

そう言ってくるのは祐一。隣には佐祐理も居る。共に、舞のサポートを行っているのだ。

「でも、こうしないと何も変化は無い…。待っていても…」

舞が呟く。彼女の足の痣の謎は、未だに解明されない。しかし、ここで立ち止まっているわけにもいかないのだ。立ち止まっていたら、きっと後悔するかもしれないから…。

その帰り道…。

「…舞。そういえば、動物園に行きたいって言ってたよな？」

「…どうして？」

「明日、行かないか？」

祐一の突然の申し出に首を傾げる舞。

「おまえ最近、切羽詰りすぎだ。肩の荷を降ろして、穏やかに過ごすことも悪くないだろ？」

「祐一さん、デートですか？」

くすりと笑って、質問する佐祐理。祐一は苦笑して返す。

「はやし立てないでくださいよ佐祐理さん。舞はそんなつもり無いですよ」

「それでも…良い…」

舞は俯いて答える。

「祐一とデートするのは、多分きらいじゃないから…」

あまり表情の変化が無い舞だが、今は恥ずかしがっていることがよく分かる。顔がほのかに赤い。

祐一はそれを見て、優しく声をかける。

「決まりだな。明日の12時ちょうど。いいか？」

「はちみつくまさん」

次の日の朝。

百花屋で祐一は、ある3人を呼び出した。

「…という訳だ。言ったのは良いが、何をしてやればいいのか、分かんなくてな…」

「祐一がデート？」

「相沢がなあ…」

「あまり、そんなことを悩む人には見えなかったけど…」

祐一が相談を持ちかけたのは、潤、香里、名雪の3人。

クラスも同じで、行動が一緒になることが多いこの4人は、クラス内でも有数の仲良し組みである。

「おまえら、何気に酷いこと言っていないか？」

ジト目で文句を言う祐一。今まで友達をイジってきたしつぺ返しのだろうか。

「わたし、デートのやり方なんて…」

「寝るな！…ったく、こいつは考え事すると寝る癖でもあるのか」名雪自身、必死に考えを絞ってはいるのだが、どうしても睡魔には勝てないらしい。

香里に目を向けるが、彼女も首を左右に振る。

「残念だけど、わたしもそういった経験は皆無よ。何も教えられないわ」

「じゃあ、おれと行かないか？」

潤が、席を立って誘う。

「出直してきなさい」

「そんなあ…」

「こいつらに聞いたのは間違いだっ たな」

祐一は3人を放って、店を出た。

「うーん…」

「見つからないね…」

辺りを見回しているのは、竜也とあゆ。

一応、本編の主人公とヒロインなのだが、今回は探し物をしている祐一達の友人という形に留めておこう。

今回の主役は祐一と舞なのだから。

「よ、竜也とうぐう」

「あ、祐一くん！… って、ボクうぐうじゃないもん！」

「祐一、あゆをイジめるのは、いい加減にやめてよ…」

早速あゆイジリ。さっきのことに懲りていないようだ。

「悪い悪い。ところで、聞きたいことがあるんだが、良いか？」

「なに？」

「おまえら、デートしたことあるか？」

「「ええっ！？」」

声を八もらせて驚く2人。

「そ、そんなことないし、それにボクと竜也くんは、そんな関係じゃないよ…！？」

「そうそう、昔からの古い友達！」

慌てふためいて否定する2人。なんとも初々しいというか…。

「… なら質問を変える」

今までの流れを説明し終えた祐一。

「なるほど…」

「舞さんと祐一くんが…」

先ほどとは打って変わって、首を傾げて唸っている竜也とあゆ。

「なにか、いいプランがあったら知恵を貸してくれ」

「… 案外、何も無いほうがいいと思うな」

何気ない様子で答える竜也。

「おれ、そういう経験は全く無いけど、色々考えるほうがなんか違う気がする。自然体で接することが大切なんじゃないのかな？」

「…確かに」

祐一は竜也の言葉を聞いて、考えが変わり始めた。

舞を喜ばせることばかりに気が行ってしまうって、基本的なことを忘れていた。

「貴重な意見をありがとよ」

そう言つて、手を振りながらその場を後にする祐一。

ふと思ひ出したかのように振り返り、こう告げた。

「そういえばおまえら、古い友達って言ってるけどな、どう見たってカップルだぞ。ちよつと竜也がロリコンみたいだな」

「えっ!?!」「うぐっ!?!」って、ロリコンってどういう意味?」

2人は真つ赤。あゆは真つ赤になつてはいたが、そのあと聞きなれない言葉の意味を竜也に聞く。

「確か…年下の女の子好きのだったけ…?」「うぐうっ!ボクは竜也くんと同じ年だよっ!」

もう見えなくなつた祐一に向かって叫ぶあゆ。

待ち合わせの場所である動物園の入り口の前には、一足早く舞が辿り着いていた。

「祐一、遅い」

「まだ時間まで10分あるだろうが」

舞は20分早く来ていた。実はここに来る前に、佐祐理から一つ聞いていたのだ。

「舞、良いですか?女の子が待ち合わせに早く来ると、男の子は申し訳ない気持ちになるから、お願いを聞いてくれやすくなるんですよ」

この言葉を聞いて、試しにやってみることにしたのだ。

「女の子を待たせるのは、最低」

「はいはい。じゃあ、これで許してくれるか？」

祐一はやれやれといった感じで、舞の手を握る。

「…っ！」「さ、行こうぜ？」

舞の応答を聞かず、動物園内に入場した。

…で。

「そればかり見てるんだな」

祐一の目線の先には、ウサギをじっと見つめる舞。

入園してから結構時間がたったのだが、ずっとこれだけを見ている。

「お母さんとの思い出だから…」

「そっか…」

舞の母親は浅倉によって殺害された。

それ以前にも、虚弱体質で命が危機に瀕したことは何度もあった。

「舞、動物園に行きましようか」

「でもおかあさん、かぜが治らないんでしょ？」

「いいのよ…わたしは…けほっ！けほっ！」

「おかあさん！」

このころより少し前、身体が治ったら動物園に行く約束をしていた。しかし、一向に良くならなかった。

あることを機に全快したのだが…それはまた別の機会に話すとしよう。

ちょうど10年ほど前の冬

「ねえ、おかあさん！」

「舞？」

舞が手を引いて入院している病院の庭に出ると

「ほら、動物園だよ！」

舞が作った雪ウサギがたくさん並べてあった。

「本当……」

こうして約束は守られたのだが……。

結局、本当の約束が果たされることは無かった。

「祐一は……居なくならない？」

「舞？」

振り向いて不安そうに尋ねる舞。

「お母さんみたいに、居なくならない？」

もう一度聞く。

祐一は、舞の目の前に歩いてきて、彼女の頭を優しく撫でる。

「安心しろ。竜也や斉藤ほどじゃないが、おれは意外と強いぞ？ 少なくとも、おまえを守ることくらいは出来ると思う」

「祐一……」

舞は、祐一の胸に身体を預ける。

「ちよつと……だけ」

「ああ……」

彼の存在を、強く感じながら、少しだけ目を閉じた。

「よし、デートはこれからだ。もっと他のやつも見ようぜ？」

祐一の言葉に、少しだけ頷いた舞は、祐一の手をもう一度握る。

「甘えん坊だな、舞は」

「祐一だから……」

これから降りかかる戦いの間の小さな安らぎのときである……。

彼らは、この安らぎを果てるまで続けられるようになるため、戦い続けるのだ…。

仮面ライダーとして…

そして人間として…。

日常 「2人の剣士」 (後書き)

如何でしたか？

あれ、あんまりほのぼのしていないような… (汗)

ていうか、原作の祐一は、もっとふざけてノリの良いキャラだったんですが、なぜか中途半端なクールキャラに…。ナイトに変身させてる影響かな… (笑)

さて次回は、潤と香里の2人がメインですよ！
ではまた…。

キャスト

相沢祐一 〓 仮面ライダーナイト

川澄舞 〓 仮面ライダーファム

舞の母親

倉田佐祐理

北川潤 〓 仮面ライダーライア

美坂香里

水瀬名雪

月宮あゆ

龍崎竜也 〓 仮面ライダー龍騎

日常 「無力ではない今」(前書き)

どうも、龍騎鯖威武です！

今回は、潤と香里に焦点をあてていきたいと考えています！

一番カップルっぽい2人ですが、またまたデートのシーンは、ほぼ無しです…(汗)

ちなみにこの話は「2人の剣士」で祐一が、潤、香里、名雪を置いて、百花屋から出て行った直後の話ですので、「2人の剣士」を先に読むことをお勧めいたします。

あと、特別ゲストも登場しますよ！誰かは…お楽しみに！
それではどうぞ…

日常 「無力ではない今」

「おまえらに相談したことが間違いだった」
そう言つて、百花屋から出て行つた祐一。

「あ…祐一、居なくなっちゃった…」

目をこすりながら目覚めた名雪がポツリと呟く。

先ほど、舞とのデートについて知恵を貸してくれと頼んできた祐一。結局力になつてくれない3人をおいて出て行つてしまった。

「まあ、あいつのことだ。何とかやってるだろ。それよりも香里さあゝん、たのみますよゝ」

今回の主役である潤は、香里に両手を合わせて拝むように頼み込んでいる。

「だから、出直してきなさいって言ってるでしょ！」

「んなこといってもゝ」

「あゝもう！やめなさい！」

香里はシッシツといった感じで、手を払いながら潤を追い払つと、そこへ…

「あれ、おねえちゃんに水瀬さん、それに北川さんも！」

現れたのは栞。ふと百花屋に立ち寄つたようだ。

「こんにちわゝ栞ちゃん」

「よ、栞ちゃん！いや、おれの将来の妹よ！」

「いい加減にしなさい！」

ドゴツ！

「ごほっ！？」

潤の言葉に痺れを切らして、肘打ちを決める香里。相変わらず鋭く、強力な一撃だ。

その攻撃を受けた潤は、テーブルの下へ撃沈。

言つておくが、彼は立派な仮面ライダーライアである。

「あゝあ。北川さん、大丈夫ですか？」

よいしょ、よいしょと言いながら、潤を起こす栞。

「やさしいなあ、栞ちゃん。お姉ちゃんに見習わせてやれよ」

「何言ってるんですか。おねえちゃん、すごく優しいですよ？」

「あつ！？栞、やめて！」

栞の言葉に、香里はあたふたと慌てながら、彼女の口をふさごうとする。

が、物凄く早口で喋りだす栞。

「だっておねえちゃん、北川さんが怪我したとき、心配ばかりしてるんですよ。「北川君に何かあったら、わたしは〜！」って」

「いやああああ！やめてえええええ！」

耳をふさいで、店内に響き渡るかのような絶叫で叫ぶ香里。

「えへへ〜。本当のことですよ、北川さん！」

そう言った後は、あらかじめ頼んだアイスを美味しそうに食べていた。

「香里、おまえ…」

「ええ、そうよ！あなたが怪我ばかりするから、心配なの！文句ある！？」

開き直ったのか、先程まで隠そうとしていた内容を、大声で叫ぶ。しかし、潤は…

「そうだったのかよ…」

いつもなら、悪ノリして香里に色々言うのだが、今回は黙って俯いた。

「なによ、そんなにバカバカしい？」

香里の質問に首を左右に振って、こう答えた

「…すまないな。そんなに気に掛けてるなんて思わなかった」

「え…？」

「おれは、おまえを守りたかったのに…。心配なんてさせてるんじゃない、ライダー失格だな」

潤は、本気で落ち込んでしまったようだ。

栞もこんな事態になるとは予測していなかった。

「えうゝ…こんなつもりじゃ無かったのに…」

居辛さを強く感じ、アイス代をその場に置いて、栞はその場から去った。

残った二人に、新しく友達が現れる。

「なんだ、ずいぶん静かなピンクだな」「あ…！」

ミツルと真琴である。

「…よう、斉藤」

明らかに、テンションが低い。

「美坂、何があった？」

ミツルに香里が一通り説明する。

「ほう、ようやく自覚したのか。だが、自覚できたってことは、それを改める気持ちがあるんだろう？」

その言葉にも、まったく反応を示さない。

それを見ていた香里は…

「北川君、行きましょ！」

「お、おい香里！？」

潤を連れて、百花屋を出て行ってしまった。

「よくわからん…」「あう…」

首をかしげているミツルに、真琴が袖を引っ張ってあるものを指差す。

それは…

「ちっ…仕方ない、サービスしてやる。おい水瀬、帰ってから寝ろ！そうじゃなければ、ここの支払い、3人分払わせるぞ！？」

「うにゅゝ…」

「おい、何処まで連れて行くつもりだよ！？」

「今からデートよ！」

「は？」

香里の言葉で目が点になる潤。

「デートしたかったんでしょ？」

「お、おお……」

「あなたを元氣付けるためと、いつも頑張ってるご褒美よ。感謝しなさい」

それだけ言うと、顔を背けてしまう。それは、恥ずかしさゆえに顔が赤くなっていることを気付かれないためだ。

「……よっしゃああああ！まじかよ香里！なら、とっとと行こうぜ！」

「きゃっ！」

今までの暗さは何処へやら、急に元氣ハツラツになって、香里の手を引いていく潤。

祐一と別れたばかりの竜也とあゆに、新たな来客。

「竜也さ〜ん！」

「へ……？」

ドンツ！

「おわあっ！？」

背後から栞に抱きつかれ、バランスを崩して倒れてしまった。

「し、栞ちゃん！？」

隣でその様子を見ていたあゆは、黙っていない。

すぐに引き剥がそうとする。

「竜也くんから離れてよ〜！」

「はっ……すみません」

すぐに離れる栞。

「どうしたの？」

「それが……」

栞は、竜也とあゆに一部始終を説明する。

「……と、言っわけなんです」

竜也が難しそうに首をかしげている

「う〜ん……」

「安心しろ。お前の判断は間違っていない」

不意に声を掛けられる。

その方向を見ると、少し離れた場所に、オレンジの上着を着た若い占い師が居た。

占い師だと分かったのは、それを思わせるような机に商売道具等を並べて座っているからだ。

机の上にある紙の上で、糸に通したコインを揺らす。

「お前、姉の恋を実らせたいんだろ？」

「え、ええ……」

「そのために取った行動が、悪影響を及ぼしてるんじゃないのかと考えているんだな？」

見事に当てる占い師。

先程の話を聞いていたのかとも考えたが、よく考えたら、それは距離的にありえない。

3人の話し声が聞こえるには、どんなに耳が良くても、今の距離の半分以上は無いといけないはずだ。

「今、2人はデートに行っている。お前の姉が起こした行動だ。相手を気遣ってな。お前の行動が、きっかけを起こした」

「本当ですか!？」

栞の喜びと驚きに満ちた言葉に軽く笑い、こう言った。

「俺の占いは…当たる」

「わたし、見てきます!」

そう言って走り去った栞。

「ああ…行っちゃった」

栞の姿が消えた後、竜也とあゆが占い師の居た方を向くと…。

占い師は最初からその場にいなかったように、消えていた。

「あ、見つけた！」

栞はデートに行きそうな場所を手当たり次第に探していると、遂に2人を見つけた。

「…それにしても遊園地なんて急すぎるし、子供っぽくないかしら？」

「んなわけあるかよ！香里といれば、何処だって楽しいぜ！」

2人は、街から少しはなれた遊園地に辿り着いた。

「もう…」

口では呆れたようだが、心は違う。自分をここまで想ってくれる潤に何よりも嬉しい気持ちになった。

「なあ、香里。さつさと…」

潤が振り向いたとき…。

香里の唇が、潤の頬に触れた。

「早く行くわよ？」

そう言つて、足早に歩いていく香里。

「…！？か、かかか香里い！？」

さすがの潤も真っ赤。

しかし、彼の性なのか…。

「アンコール！もう一回お願いします、香里さああん！」

彼女を追いかけていった。

2人をほほえましく見つめる栞を含めて、それを見ていた者がいた。先ほどの占い師だ。

誰に言うことも無く、潤の未来を占っていた。

「北川潤…。これから凄まじい困難と苦しみを味わうことになるだろう。」

先ほどと同じ言葉だが、次は悲しそうに言った。

「俺の占いは当たる…」

しかし、次は期待を持った様子でこう言う。

「だが、運命は変えられる。それが出来るかどうかは…お前次第だ」

これから降りかかる戦いの間の小さな安らぎのときである…。

彼らは、この安らぎを果てるまで続けられるようになるため、戦い続けるのだ…。

仮面ライダーとして…

そして人間として…。

日常 「無力ではない今」(後書き)

あとかき

如何でしたか？

うーん…。やっぱりデートするシーンが書けないです…(汗)。

私が、そういった経験が無いからでしょうかね(笑)

申し訳代わりに登場した、特別ゲストの占い師。誰だか分かりますか？

そう、彼ですよ！一応、名前も同じです。

ただ…、TV本編やTVSPで登場した彼ではなく、この世界の間です。

故に城戸真司との面識ありません。

次回は、久瀬と佐祐理をメインにします。

お楽しみに！

それでは…。

キャスト

北川潤〓仮面ライダーライア

美坂香里

美坂栞

水瀬名雪

沢渡真琴

相沢祐一〓仮面ライダーナイト

齊藤ミツル〓仮面ライダーインペラー

若い占い師

月宮あゆ

龍崎竜也〓仮面ライダー龍騎

日常「欲に忠実に…」 (前書き)

今回は、勉強会というものを題材にしてみました…が、あまりそのシーンが無い(汗)

因みに、今回は以前の「無力でない今」の次の日です。

もちろん、原作でゾルダだった彼と、その秘書も登場しますよ！

結構、短いのですが、お許しください…。

それではどうぞ…。

日常「欲に忠実に…」

家で、学校での課題…いわゆる冬休みの宿題というものに取り組む久瀬。

最近の戦いの激化で放置していたのだ。

一人だけのつもりだったのだが…。

「…ん？何か違うような…」

「あはは、それ違いますよ。ここは、このページを参照にしてくださいね」

何故か、佐祐理が居る。

どうして、こうなったのかと言うと…。

その日の帰り道。

「そういえば、課題を放置したままだ…！」

何気なく思い出したこと。このままでは、提出物の評価が下がってしまう。いままで、何とか必死に勉強してきたのに、3年のこの時期に失敗することは痛手だ。

「おう、生徒会長！」「あ、久瀬先輩だ」「久瀬さんだね」

そう言っただけなのは、潤と名雪とサトル。

「やあ。どうしたんだ、珍しいチームだな」

「まあ確かにおれと虎水は、全員が集まったとき以外に顔を合わせること少ないけど…」

そういえば、と久瀬は思い出した。

何故か潤とミツルが鉢合わせになり、よく喧嘩していることはあるが、サトルと潤が一緒にいるところはあまり見ない。

だが、どうでもいいことなので、置いておくことにした。

「で、久瀬さんは何をあせていたの？」

「ああ、課題だよ。ここ最近、放置したままでね」

「へえ…学生って大変だね」

サトルは中卒なので、その様な経験が無い。ちなみに竜也、ミツルも同様である。

「…聞いた」

と、背後から物静かな少女の声。

久瀬が振り向くと、舞がいた。

「生徒会長さん、佐祐理と勉強すると良い」

舞が何かを察したような発言をし、それに久瀬は少し戸惑う。

「い、いや、倉田さんは忙しいんじゃないでしょうか？」

「勉強すると良い」

…ゴリ押しである。

それで、なんだか言いつつも…。

「はえ、佐祐理は頭悪いですよ？ね、舞」

「佐祐理は頭が良い…」

舞は佐祐理を呼んで、久瀬のことを話した。なぜか、今回の舞はかなりアクティブだ。

結局、久瀬は佐祐理と勉強することにした。

佐祐理は、3学年でも首席に到達しても、なんら不思議ではないほどの成績優秀者だ。

一方の久瀬も成績はかなり優秀。佐祐理と並ぶほどといっても良い。そんな彼と一緒に勉強する人といえば、自然に佐祐理になるであろう。

「あはは、なら行きましょう！」

そう言つて、佐祐理は楽しそうに歩いていった。

舞は、その様子をじっと見つめて、久瀬に囁く。

「あとは…頑張つて」

それだけ言つと、すぐにその場から立ち去った。

「佐祐理を悲しませたら…許さない」

なぜか、脅し文句のような一言を残した。

「本当にいいのだろうか、僕なんかと…」

「いいんじゃない？」

その言葉に振り向くと、弁護士バツじつきのスーツを着た30代ほどの男性と、少し無愛想にしている男性の2人組みが居た。話しかけたのは、スーツの男性らしい。

「入ってのはさ、自分の欲に忠実にならないと面白くないのよ。さつきからお宅、全然自分の欲を出してない。そんな人生つまらないと思わない？」

久瀬は佐祐理のことが最近気になりつつある。だが、それは誰にも言っていない。舞は、なんとなく気付いているようだが、この初対面の男がなぜ、こんなにすらすると自分のことを言っているのだろう…。

「は、はあ…。というより、貴方は一体誰ですか？」

「ま、黒を白にするスーパ―弁護士ってどこ？」

やはり弁護士のようだ。さらにかんりの自信家である事が、今の発言から伺える。

「俺にもさ、狙ってる人はいるよ。『令子さん』って言うんだけど、なかなか振り向いてくれなくてね。でも、しょっちゅう食事に誘ってるよ。お宅もさ、がんばんなよ。自分の欲を出さないと、時として人を悲しませることもあるのよ。ここ、重要ね」

それだけ言うと、手を振って後ろを向いて去っていった。

「ゴロちゃん、今日の夕食は、あっさりした懐石料理がいいな」

「分かりました。じゃあ、それに合う美味しいもの買って帰りましょう」

「令子さん誘ってみようかな？ 薔薇の花を百万本。やっぱり男は薔薇でしょ。それに俺の角度『右斜め45度』が加われば、令子さんも落ちるかもね」

そんな会話を残して…。

「久瀬さん！早く〜！」

「あ、はい！」

遠くから呼ぶ佐祐理の声に返事をして、元の場所を向くと…。

弁護士の男とゴロちゃんと呼ばれた男は居なくなっていた。

一方、相変わらず探し物をしている竜也とあゆ。

「商店街以外の場所でなくしたのかも…」

「うぐう…思い出せないよぉ…」

彼女の記憶も頼りにならないので、手がかりはかなり少ない。

「竜也、あゆ」

舞が現れ、話しかけてきた。

「あ、舞さんこんにちは。どうしたの？」

あゆの質問に先ほどのことを話す形で返答した。

「久瀬さんと佐祐理さんが…しらなかったなあ…」

「わたしは、佐祐理に幸せになって欲しい。わたしに思いつくその手助けは、生徒会長さんと一緒に居るようにさせることだと思う」

「…そうだね、おれも舞さんに賛成。何が最善の方法かなんて分からないけど、とにかく行動を起こすことが大切だと思うな」

そして、元の時間まで戻る。

順調に課題を終わらせているが、突然、佐祐理が久瀬に聞く。

「久瀬さん。最近、佐祐理の顔を、ちゃんと見てくれなくなってますんか？」

「ぼ、僕がですか…？」

「はい。門矢さんたちが来るちょっと前から、面と向かって話するとき、すぐにそっぽを向いてますよね？」

心当たりはあった。

「何か悪いことしましたか…？佐祐理はバカですから、わからなくて…」

佐祐理は悲しそうにうつむいている。その様子から、泣いているようにも見えた。

「あ、いや、違うんです…。それは…」

久瀬にとって自分の行動は、彼女のことが気になりつつある故の反応であって、拒絶ではない。

あの弁護士の言葉を思い出した。

自分の欲を出さないと、時として人を悲しませることもあるのよ。ここ、重要ね。

まさに、今がその状況だった。

彼女を悲しませたくはない。

だから久瀬は、自分の思いを自分なりに言葉にした。

「その…。正直に言います。あなたのことが気になってました。だから、どうやって接したらいいのか分からなくなっ…」

「…そう…だったんですか…」

佐祐理はその言葉を聞いて、安心と心が温くなる感覚を覚えた。今、目の前にいる人が自分にとって、どういう存在なのかも…。

「じゃあ、佐祐理は…」

「待つてください」

佐祐理の言葉を途中でとめる久瀬。

「この続きは、ちゃんとしたときに言いたいです。だから、待つてくれませんか。きっと、僕はあなたに相應しい人間になります」
「はい…待つてます！」

これから降りかかる戦いの間の小さな安らぎのときである…。

彼らは、この安らぎを果てるまで続けられるようになるため、戦い続けるのだ…。

仮面ライダーとして…

そして人間として…。

日常「欲に忠実に…」（後書き）

あとがき

如何でしたか？

うーん…。ほのぼのしてるのか、これって…（汗）自分の恋愛描写のセンスが、しょぼいことを痛感します…。
気を取り直して、次回はサトルと名雪です！
どうやって話を作ろうかと模索中です…。
それでは…。

キャスト

久瀬シュウイチ〓仮面ライダーゾルダ

倉田佐祐理

川澄舞〓仮面ライダーファム

北川潤〓仮面ライダーライア

水瀬名雪

虎水サトル〓仮面ライダータイガ

スーパー弁護士を名乗る男

ゴロちゃんと呼ばれた男

月宮あゆ

龍崎竜也 〃 仮面ライダー 龍騎

日常「英雄」(前書き)

今回は、過去の回想シーンが主となっております。

何故サトルがタイガになったのか。そのシーンをもっと鮮明にしてみました！

それではどうぞ…。

日常「英雄」

「本当に助かってます、サトル君。いつも買い物に付き合ってもらって」

「ううん、平気ですよ秋子さん。僕だって、何かお手伝いがしたいですから」

「ありがとね、サトちゃん」

夕方の買い物帰り。

買い物袋を抱えたサトルと、名雪、秋子の3人が並んで歩いている。その姿はまさに家族といえるだろう。

「あ、竜也君とあゆちゃん！」

名雪が嬉しそうに駆けてゆく。その先には、探し物をしている2人の少年と少女がいた。

「こんにちは、名雪さん！」

「見つからないよぉ…」

あゆは名雪に気付かず、未だに探し物の最中。

「まだ見つかりそうもない？」

「うん…。あゆの大事にした物みたいだし、おれが贈った物だから、絶対に見つけたいんだ。あゆも、あんなに必死になって探してるんだけど…」

竜也と名雪が会話している姿を見ていた秋子は、口に手を当てて、サトルにこう告げた。

「私、少し思い出した用事がありますから、先に帰りますね。名雪をお願いしますか？」

「はい。なゆちゃんは僕が責任を持ってつれて帰ります！」

「まあ、頼もしい。じゃあ、よろしく願いします」

少し微笑んだ後、秋子はその場を去った。すると…。

「昔の事、思い出してみない？」

ふと聞こえる声。その方向を振り向くと、大学生くらいだろうか。小説を右手に持った青年がベンチに腰掛けていた。

その小説の名は、カフカの「変身」。

「何故、君が英雄になりたかったのか…知りたいな」

「え…？」

7年前のことである。

「もお…いやだ…」

1人で泣きじゃくる少年。

彼は、両親から愛情を、全くそそがれなかった。家に居れば常に両親から受ける虐待。外に出ても、誰一人彼を気にするものはいない。少年に居場所はなかった。

「僕は…どこに行けばいいの…？」

誰も答えてはくれなかった。

…今までは。

「雪、積もってるよ？」

そう言っただけしかけてきたのは、青い髪を三つ編みに結んだ、同年頃の少女だった。

彼女の言葉で、自分の頭を手で触れると、少量の雪だったであろう冷たい水滴が手についた。

「…もしかして、泣いてたの？」

どんなに泣き虫であっても、女の子に涙を見せたくないのが男の子の意地。一生懸命、涙を拭いて返事をした。

「泣いてないよっ！」

「でも、目が赤いよ？」

涙は拭いても、その証拠までは隠し通せないのが悲しい。少女は簡単に見抜いた。

観念した少年は、何故泣いているのかを話した。

「…僕は、どこに行けば良いか分からない」

「お家に行けば良いと思うけど…迷子なの？」

「やだっ！家はやだ！君まで、そんな事言うの！？」

怒鳴り散らして、暴れる少年。

家には、彼の恐怖の対象が居る。戻るなどまっぴらごめんだろう。

「ご、ごめんね！…もしかして、もつと遊びたいの？」

困ったように謝る少女。落ち着いた少年を見て、彼女なりの考えを言ってみた。

「…そうすれば、どこに行けばいいか分かるかな…？」

少し不安そうだが、同時に期待を込めて聞く少年。

「うん、きつと！一緒にあそぼ！わたし水瀬名雪！あなたは？」

「虎水サトル…」

「じゃあ、サトちゃんだね！」

これがサトルと名雪の出会いだった。

「ねえ、どう？雪ウサギ作ってみたの！」

「…かわいいね」

名雪が嬉しそうに雪ウサギを作って話しかけても、どこか虚ろな表情でかえすサトル。

「…えいつ！」

「うわっ！？」

雪を丸めて、サトルに投げつけた。

「…なんだよっ！」

ムキになったサトルは、名雪に雪玉を投げ返した。

「きゃっ！あは、雪合戦だよっ」

その日の夕方頃まで2人は遊びつくした。

「はあ…はあ…僕の勝ちだね…」

「うっ…負けちゃった…」

雪玉をあてた数は圧倒的にサトルが勝っていた。

「…そろそろ夜になるね。サトちゃん、もうお家に帰る時間だよ？」

「家…？やだ、かえりたくない！かえったら、また叩かれる…」

サトルは、相変わらず家のことになると異常なほど拒絶するような様子を見せる。

「うっん…。じゃあ、わたしのおうちにおいでよ！」

「え、でも…」

「ほら、いこ！」

その日、秋子はサトルを受け入れた。

「どうして、君のお母さんは優しいの？」

「だって…お母さんって優しいものだよ？」

名雪の言葉はサトルを無意識に苦しめる言葉となった。

「そうなんだ。羨ましいな…。僕のお母さんはいつも怒って、僕を殴るんだよ。お父さんも同じ。どうして、僕だけ…？」

「あ…」

幼い彼女にも、どういう事なのかは、分かってきた。

「じゃあ、わたしのお母さんが、サトちゃんのお母さんになればいいんだよ！」

「君…もしかして、バカなの？君のお母さんが、僕のお母さんになれるわけないよ！」

「了承」

ふと、声がしたほうを振り向くと、頬に手を当て微笑む秋子が立つ

ていた。

「あなたの両親には、わたしから言っておきます。もしサトル君が
良いのなら、わたし達の家族になってくれませんか？」

「僕は…いいのかな？」

「やった〜！サトちゃん、今日からわたしの家族っ！」

こうして、サトルは水瀬家の家族の一員となった。

それから何日もたった。

サトルは随分と水瀬家に打ち解けられ、以前の暗い性格は明るく変
わっていった。

「なゆちゃん、ごはんが出来たって！おきなよ！」

「うにゅ〜…」

何気ない日々。サトルにはとても新鮮に感じられ、そして何よりも
幸せだった。

だが…。

「ねえ、サトちゃん。もうすぐね、わたしのいとこの祐一が来るっ
て！」

「祐一…君？」

「うん、昔からよく遊んでいたけど、これからはずっとわたしの家
に住むんだって！」

「そう…なんだ…」

サトルは彼女の様子を見て、何か孤独な感情を覚えた。

「名雪、サトル君、ご飯ですよ」

「あ、サトちゃん、ごはんだって！」

「…今日はいいいよ。おなか減ってない」

その日の夜。

「なゆちゃん…祐一君のことが好きなんだ…」

彼女は祐一が来ることを何よりも嬉しそうに話していた。

嫉妬…なのだろうか。だが、それに抵抗するほど、その頃のサトル

は強い感情を持っていなかった。

「そつか。僕のことを好きになってくれる人なんて、いないんだ。あはは…ははははは…」

静かな部屋で、サトルの乾いた笑い声と鼻をすするような音が響いていた。

サトルは、名雪達の前から去った。

いずれ、独りぼっちになるくらいなら、自分から消えたほうがいいと考えていたからだ。

だが、自分の家に戻るつもりはない。一人で生きることを決意した。

それから、6年ほど経ったある日。

サトルは、様々なところを放浪しながら、何とか生きてきた。死のうとしたことも何度かあったが、結局、恐怖が勝り、実行できなかった。

この日、彼は想像も出来ない出来事に巻き込まれる。

「ミイイイイイイ！」

「ひっ、怪物!？」

目の前には、黄色いセミを模した異形「ソノラブーマ」が居た。

一瞬、逃げようとしたサトルだが…。

「ここで死ねばいいのか…。僕は自分で死ねないもんね」

あきらめたように、目を閉じたサトル。

ソノラブーマは好機と見たか、腕先の巨大な鉤爪でサトルに襲い掛かる。

… 筈だった。

「又ンツ！」

ドゴオオオオオオオオオオ!

「ギャアアアアアアアア！」

突如、目の前を黄金の光が包み込み、ソノラブーマは跡形もなく消えた。

悟るが恐る恐る目を開くと、そこには光り輝く影がいた。

「似ている…。英雄になりたくはないか？皆に愛される英雄に」

「…英雄？」

英雄。

その言葉に、サトルは異常なほど心地よさを感じた。

「みんなに好きになってもらいたい…。英雄に…になりたい！」

その瞬間、目の前に青い長方形の物体が投げつけられた。

カードデッキだ。

「使え。英雄に近づくための武器だ」

そのカードデッキをゆつくりと掴む。

英雄になるために…。

「変身っ！」

話は、今の時間へと戻る。

「それで…。今もなりたい？」

そう問いかける青年。

竜也と話している名雪を見ながら、笑顔で返した。

「…ううん。僕は英雄になりたいんじゃないじゃなくて、なゆちゃんに好きになってもらいたかった。だから…」

「へえ…。なら、大丈夫だね。英雄ってさ、なろうとした瞬間にアウトラしいからね」

「うんっ！…って、あれ？」

強く頷きながら、振り返ると…。

あの青年はいなくなっていた。

「よう虎水。名雪と一緒にか？」

祐一と真琴、さらにミツルも居た。

真琴はおなかを押さえ、元気がない様に呟く。

「あう…」

「真琴が腹をすかせているんだ。そろそろ竜也とあゆを呼び戻す。竜也しか、家で料理できる奴はいないからな」

「おれも腹へってさ。名雪と虎水が居ないと晩飯が食えないんだ」
今は、みんなが自分のことを大切にしてくれている。

彼は、なるつもりはなかっただろうが、いつの間にか「英雄」になっていた。

「じゃあ、かえろ。僕たちの家に！」

これから降りかかる戦いの間の小さな安らぎのときである…。

彼らは、この安らぎを果てるまで続けられるようになるため、戦い続けるのだ…。

仮面ライダーとして…

そして人間として…。

日常「英雄」（後書き）

あとがき

如何でしたか？

いやあ、デートではなく過去話（汗）。まあ、戦闘描写がほぼないという点でお許しください（笑）。

金色の影が「似ている」と言っていたのは、性格のことです。

オーデインは、インペラーを除いて原作と似た性格のものを選んでいるのです。

次回で日常は最後なのですが、またしても過去話です。

お付き合いください（汗）。

ではまた…。

キャスト

虎水サトルⅡ 仮面ライダータイガ

水瀬名雪

水瀬秋子

沢渡真琴

斉藤ミツルⅡ 仮面ライダーインペラー

相沢祐一Ⅱ 仮面ライダーナイト

金色の影（仮面ライダーオーデイン）

小説を読む青年

月宮あゆ

龍崎竜也 〓 仮面ライダー 龍騎

日常「春が来たら…」（前書き）

日常編、最終話になりますミツルと真琴をメインにしたストーリー。
この話は、Kannonの原作にあったシーンを基に書きました！（
様々な改造あり）

ちなみに、「英雄」の直後の話です。
それではどうぞ…。

日常「春が来たら…」

「てえああ！」「だああああああああああ！」

ドガアアアアアアアア！

凄まじい爆発。その理由は、龍騎とインペラーにあった。

たった今、モンスターを倒したところなのだ。

ちょうど、サトルたちと別れた後に遭遇したのだが、仮面ライダーに休み無しとは、よく言ったものだ。

「よっし！」

2人は変身を解き、ミツルと竜也の姿に戻った。

「平気だった？」「あうう…」

物陰で見守っていた真琴とあゆが近づいてきた。

「大丈夫、これくらいなんとも無いよ」「まさか、おれ達があんなモンスターに苦戦するんでも？」

「よかったあ…」「あうっ…！」

あゆは2人の反応を見て安堵し、真琴はミツルに飛びついた。

「ったく、いつまでも子供のつもりか？」「あう…？」

飛びついた真琴をうつとうしそうに押しのけるミツルだが、それは本意ではない。彼女の自立をほんの少しでも導くためなのだ。

ただ、真琴はそのことが分からないため、少しだけ不安げな眼差しでミツルを見る。

少しいたずらげな笑みを浮かべて、ボソツと呟くあゆ。

「ミツルさん、真琴ちゃんにメロメロのくせに…」

「そうだ。悪いか？」

「あ、あれ？」

あゆは、ミツルの隠している本音を暴くつもりだったのだが、意外にも慌てふためくことはせず、さらりと本音を述べるミツル。

「おれは自分の感情を押し殺すことは苦手だし、真琴もおれの事を好きでいてくれる。おれが隠す必要があるとでも思ってたか？」

「うぐう…参りました…」

ぺこりと頭を下げ、謝るあゆ。それを見ていたミツルは仕返しを開始した。

「おまえは隠してるんだな。おれよりも感情を押し殺すことは上手いだろうしな」

「え…な、なんのことかな？」

ミツルの振りに、冷や汗を一筋たらすあゆ。

「いやあ、羨ましいなあ〜！初々しいなあ〜！」

近づいてくる声。

振り返ると、警備員らしき青年が屈託の無い笑顔で歩み寄ってきた。中くらいの大きさのダンボールを抱えている。

「若い少年と少女の恋！あこがれるなあ〜！」

「なんだ貴様？」「ミツル、失礼だって！」

少し怪しむミツル。

「ああ、ゴメンゴメン。名乗りたいんだけどね、名詞忘れちゃってさ。まあ、ここは偶然、出会ったイケメン警備員ってことで！」

随分とフレンドリーな警備員である。

「ところでさ、その君」

そう言つて、警備員はミツルを指差す。

「なんだ？」

「お宅さ、いろいろ吹っ切れたんだ。昔は自分の願いにだけ執着して、周りを見てなかったみたいだけど、今は目の前のこと以外にも見えてるんだね。教えたことが色々あったんだけど、君に関しては大丈夫そうだな。自分の本当の願いが叶ったとき、残った叶えるための力を正しく使っている。俺も「百合絵さん」って婚約者がいてね。彼女と出会えたとき、残された力を上手く使えなかった…」

「わけが分からん…」

彼はどうやらミツルに伝えたいことがあつたらしいが、今はその必

要はなくなつたらしい。

「そうだ。教える代わりに、この子、貰ってくれない？周りの住民がうるさくてさ。保健所に引き渡すのも可哀想だね」

ダンボールをあけると、そこには小さな猫がいた。
「ウニヤ」

「あ、たい焼きつまみ食いしてた、猫ちゃん！」
「うそ!？」

覚えているだろうか。第2話であゆが竜也に伝えたことを…。

「たい焼き屋さんでたい焼きを買ったんだ…。でも、お金がないことに気がついて…」

「そのとき、猫ちゃんがやって来て、置いてたたい焼きをつまみ食いしようとしたの…。そしたら、おじさんがものすごい怒って、それで怖くなって…」

その猫がこれなのだ。

「泥棒する猫を、おれ達が飼えって言うのか？」
呆れ口調で言うミツル。

「あうう…！」

突然、真琴が首を振り、猫を抱きかかえる。少しだけ上目遣いになり、涙を目に溜めてミツルを見つめる。

「くっ…。竜也、家にこいつを飼えるスペースの余裕あるか？エサ代諸々は、おれが払うから」

「おれは良いよ。それにエサ代とかだって、おれもちよつとは出すよ。家族がまた増えるなんて、嬉しいからね。あゆは？」

「ボクも賛成！」

満場一致。この猫は竜也の家に住むことになりそうだ。

「助かったよ。じゃ、後よろしく！あ、最後に言っとくよ。大切なのは願いを叶えるまでじゃなくて、叶えたあと」

「まったく…。猫を押しつけやがって…ん？」

猫をチラリと見た後、警備員のいた方向を見ると。

彼は消えていた。

「どこ行っただら？」「逃げ足だけは速いらしいな…」

「この前の占い師の人と言い、最近は急に消える人が多いね」

警備員のことはさほど不思議に思っではおらず、早速、猫の名前決めが始まる。

「こいつ、名前どうする？」

「あう…」

真琴が地面の砂で文字を書き始めた。

「ピロ」

それを書くとき、ミツルの腕に抱きつく。

「ピロ…それでいくか。名前決めに時間かけることも面倒だしな。異論はあるか？」

「ピロ、良い名前貰ったね！」「よろしく、ピロ！」

「みんなあ！」

遠くから2人を呼ぶ声がする。

名雪とサトル、そして久瀬だった。

「さつき、爆発がきこえたんだが…」

「遅いぞ久瀬。もうおれと竜也で片付けた」「ありがとうございませう。もう大丈夫ですよ」

「そ、そうか…。とりあえずは安心したよ」

ミツルと竜也の言葉で安堵する久瀬。

「わあ、猫だあ！」「な、なゆちゃん！猫アレルギーでしょ！？」

名雪は、真琴が抱いているピロを見た途端、大好きなものを見つけ

たかのように近寄ろうとする。

しかし彼女は、猫に触れると涙や鼻水が出てしまっ、いわゆる猫アレルギーなのだ。そのことを知っているサトルは、何とか引き離そうとする。

「ピロって言うんだ。あ、今からピロの世話道具を買いにいかないと…。ミツル、真琴ちゃん、先に帰って、ピロと遊んであげて。久瀬さん、あゆ、手伝ってくれる？」

「ああ、構わないよ」「うん、いいよ！」

そう言って、3人は街へと戻っていった。

「そういえば、クリスマスが近いね。なにか、計画してみようかなあ…」

ふと独り言を呟きながら、竜也は歩いていった。

名雪とサトルと別れ、帰り時の途中。

「そういえば真琴。おまえ最近、マンガをよく読むな」

ミツルがそういったのは、ときより書店に立ち寄ったとき、真琴はよく少女マンガを立ち読みしている姿を見るからだ。

「あうう…」

ミツルの初任給で買ったマンガがあるのだが、それを真琴は肌身離さず持っている。

ページをめくり、一つの単語を指差す。

結婚

少女マンガではよくある話なのだが、彼女はこれをずっと見ていたらしい。先ほどの警備員が言った婚約者等の話も、真琴はかなり聞いていたような気がする。

「結婚か…」

真琴は以前、ミツルと一度別れる前のときに、高熱を出していた。そのとき、おぼろげに彼女が自分と結婚をしたいと呟いていたこと

をふと思い出した。

「あうう…くるしい…」

「しっかりしろ。いたずらを成功させるんだろ？」

「ミツルう…そばにいてくれる？」

「…」

そのときのミツルは復讐に燃えており、自分と一緒に居れば、彼女を巻き込んでしまう。そのことは良く思っていなかった。だから、その答えは出せなかった。

「そうだ…結婚…。結婚したら、ずっと…一緒なんだよね？」

彼女はミツルと、どうしても一緒にいたかった。

だから、彼女が知っている大好きな人とずっと一緒にいることの出来る唯一の方法を、口にした。

「…春が来たらな」

真琴を悲しませないための嘘だった。

その言葉を嬉しそうな表情で受け止めた。

「そうだね…春が来て…結婚して…ずっと春だったらいいのに…」

だが、今は違う。

「…大丈夫だ。結婚なんてしなくても、おれがおまえを離さない。でも…おれにおまえを絶対に守ることの出来る自身が着いたら…」
一呼吸置いて、真琴と正面を向いて言う。

「真琴、結婚してくれ」

今までの中で、これ以上無いほど幸せそうな表情で頷く真琴。

「あ…いあ…と…」

かすれるような声だったが「ありがとう」と言った事は分かる。
「こつちこそありがとうな」

「ふふ、盗み聞きは無粋でしたが、聞かせていただきました」
「天野…！？」

物陰から、美汐が現れた。

「あうう…」

真琴も恥ずかしいらしく、顔を真っ赤にしてミツルの後ろに隠れる。

「わたし、2人の婚約の証人にさせていただきますね」

「…くえない奴だな。さて帰るか。竜也とあゆも帰ってきたら、一緒に飯を喰うぞ。天野もどうだ？」

美汐がニコニコしているのが気に食わないのか、ぶっきらぼうに言い捨て、歩き去ってしまったミツル。

真琴は美汐の腕を引っ張り、彼を追いかけた。

「大丈夫ですよ。あの人はとても優しい人ですから…」

これから降りかかる戦いの間の小さな安らぎのときである…。

彼らは、この安らぎを果てるまで続けられるようになるため、戦い続けるのだ…。

仮面ライダーとして…

そして人間として…。

日常「春が来たら…」(後書き)

あとがき

如何だったでしょうか。

他のキャラの中では一番長かったのですが、結構上手く出来たような気がします(デートではありませんが)。

逆に警備員の存在意義がほぼ無しに近い…(汗)。

あとピロですが、NoMen編で登場していなかったなので、近々追加シーンを書きます。何卒、ご了承を…。

一旦これで、日常編は終了です。

次回からは、竜也が物語開始前に何があつたかをメインにした「序曲」(EPISODE Kannon First)を展開予定です！

ではまた…。

キャスト

斉藤ミツル〓仮面ライダーインペラー

沢渡真琴

天野美汐

虎水サトル〓仮面ライダータイガ

水瀬名雪

久瀬シュウイチ〓仮面ライダーゾルダ

警備員

月宮あゆ

龍崎竜也 〓 仮面ライダー 龍騎

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5990w/>

仮面ライダー龍騎 ~ EPISODE Kanon Trillogy ~

2011年11月12日12時09分発行